



## 【豚編】

夏、屋内には屋根から 1/2、西側面から 1/4、東・南・北の側面から合わせて 1/4 ほどの割合で熱が入ると言われています。夏場は陽が高いので南は意外と暑くありません。

屋根の暑熱対策は計画的に経費をかけての取り組みとなりますが、さしあたっては屋根直下の暑い空気を追い出し、新鮮な外気を取り込むことが必要です。暑い時、豚は舌を出して息を大きく吐きながら体の水分を蒸発させており、これにより湿度が上がります。夏場の畜舎の換気には、畜舎にこもる余分な水分を排出し、体感温度を下げる効果もあります。換気扇や扇風機を効率よく使用してください。

夏季、我々動物は夜間の涼しさで体力を回復して、翌日の暑さに備えます。日中の対策は重要ですが、夜どれだけ早く昼間の熱気から家畜を解放してやれるかが夏バテ防止のカギになります。

西日のあたる畜舎は夜遅くまで舎内温度が下がりませんので、体力回復の時間を奪ってしまいます。西日を避け、風の流れを妨げないよう、すだれや寒冷紗で簡単なひさしを作るなどの西日対策をお勧めします。

豚熱の脅威が去らぬご時世ですので放牧は難しく、舎飼いが基本となります。豚たちが四六時中過ごす畜舎の環境を快適に保ってあげてください。

(金谷)



## 【鶏編】

全身を羽毛で覆われ汗をかくことができない鶏にとって、暑さは生産性や生命維持におおきな影響を及ぼします。

本格的に暑くなる前に飲水機器、換気ファン等の確認を行い、発酵熱や多湿のもととなる鶏糞を取り除いておくようにしましょう。

飼養衛生管理基準で求められている防鳥ネットは、埃やクモの巣が付着することで通気性が落ちます。こまめに除去するよう心がけましょう。また鶏舎の周辺の草刈り・枝払い、不要物品を片づけることで鶏舎の風の通り道を確保しましょう。野生動物の隠れ家をなくすことや消毒作業をしやすくするためにも、周辺環境の整備は大切です。

鶏の密飼いは、暑熱による大量死につながる他、免疫力低下を引き起こし伝染病発生のリスクを上げます。適切な飼養密度の目安は、畜舎や環境にもよりますが、採卵鶏で 1 羽あたり 0.04~0.06 m<sup>2</sup>、肉用鶏は 0.05~0.06 m<sup>2</sup> (1 坪あたり 60 羽) です。

気温が 27℃を超えてくると飼料摂取量が低下し、産卵率や卵重の低下につながります。さらに 35℃を超えると開口呼吸 (パンティング) が増えることで血液がアルカリ性に傾き、増体、産卵性、免疫機能の低下を引き起こします。これを防ぐために重曹を水や飼料に添加 (0.5~0.7%) して与えることが有効です。

(大北)